

新学習指導要領を具現する小学校国語科「読むこと」領域の授業改善（第二年次） －確かな言語能力を身に付けさせる授業と評価の工夫－

長期研究員 土屋 智明

I 研究の趣旨

言語活動の充実など新学習指導要領の趣旨を具現する授業をめざし研究を進めてきた。第一年次の研究からは、成果として「言語活動を単元を貫く形で設定し、単元構想に生かすことの大切さ」「単元と授業のそれぞれのねらいを密接に関連付けて授業を行うことのよさ」などの授業改善のポイントが見えてきた。一方、課題としては、文学的教材を扱う単元の読み取りの時数減に対応する手立てや評価などがあげられ、更なる授業改善の必要性も感じられた。

以上の理由から、第二年次は授業改善の手立てとして「教材文活用」の授業の工夫と「評価の工夫」の二つを研究の柱としたサブテーマへと変更し、以下に述べるような仮説を設定し、研究主題に迫った。

II 研究の概要

1 研究仮説

小学校国語科の「読むこと」領域の授業において、以下の視点に基づいた手立てを講じれば、子どもが読む観点を身に付けながら、伝え合って学習に取り組み、ねらいとする言語能力を確かに身に付けることができるであろう。

【視点1】「教材文活用」の授業の工夫

【視点2】「読むこと」領域の評価の工夫

2 研究の内容と実際

対象児童 第6学年 児童25名

実践単元Ⅰ「伝えてみよう！『狂言』」（6時間）

実践単元Ⅱ「賢治のおすすめ作品をしょうかいしよう」（9時間）

(1) 「教材文活用」の授業の工夫

① ねらいを絞った「教材文活用」の授業計画

「教材文活用」の授業とは、「教材文を教える」こと、つまり内容理解の重視から「教材文を活用してねらいとする言語能力*を身に付けさせる」（以下「教材文活用」）ことへ意識を変換した授業である。

1 単位時間ごとのねらいを絞り、教材文を活用して言語能力を身に付けさせていくためには、下記の手順で授業計画を立てていくことが大切だと考えた。

※ 言語能力とは、学習指導要領国語編の指導事項を単元や1 単位時間ごとの能力として具体的にとらえたもの。

1 単元のねらいを明確にする

- ・ 学習指導要領や年間指導計画の確認と重点化
- ・ めざす子どもの姿としてシンプルに具体化・明確化

2 ねらい達成に合致する言語活動を設定する

- ・ 言語活動例や教材・ねらいの特質から設定
- ・ 単元を貫く形での設定（単元内で一貫した目的意識）

3 言語活動を行うために必要な言語能力を絞り、1 単位時間ごとに割り振って単元計画を立てる

- ・ 単元と1 単位時間のねらいの密接な関連付け

4 1 単位時間ごとのねらいとする言語能力を教材文を活用して身に付けさせていく

- ・ 子どもの思いや目的意識などの必要感
- ・ ねらいと関連した必要な部分のみ教材文を使用

ここで、1 単位時間ごとのねらいを絞って「教材文を活用して言語能力を身に付けさせる」ことは、教師が教えたいことだけを詰め込むことではない。単元のねらいには当然、関心・意欲・態度も含まれている。そこで、子どもが教材文と正対し、教材の魅力に触れる時間も大切にしたい。教材文に対する子どもの関心や思いを高めることが言語能力を高めるためにも有効であると考えたからである。

例えば「賢治のおすすめ作品をしょうかいしよう」では、擬音や造語あふれる『やまなし』において、子どもたちの最大の疑問の対象であった「クラムボン」の正体について考える時間を設定した。言葉を根拠にしながらも、その正体を自由に想像できる「クラムボン」について教室で友だちと伝え合いながら考えることは、「クラムボンの正体がいろいろあって授業が楽しかったです。意見が分かれたけ

ど、ぼくはあわだと考えています」などの教材文への関心を引き出した。単元の最後では「かには、やまなしのいいにおいで楽しくなった。その種はまた木になっていくから、命がつながっていくことが大切と伝えたかった」と自分なりの主題をまとめることができていた。このことから、教材文への関心を高めながら、自分の読みを確立した姿が見て取れた。言語能力を身に付けさせるときには、関心や意欲の醸成を図ることも欠かせないとする。

② 読む観点の明確化と身に付けさせるための取り組み（6か年計画）

文学的教材の読み取りの時数減に対応するために、次作品を読むときに活用できる観点を身に付けさせ、自力読みの力を高めたいと考えた。このことにより、授業を進める際の基本的な設定について読む時間を短縮できると考えたからである。読む観点とは、下の一覧に示した文学的教材の基本的な設定などのことである。しかし、単学年で身に付けさせることは時間的にも困難であるため、これらを6年間の文学的文章教材で割り振り、身に付けさせるようにした。

1 登場人物	2 中心人物	3 できごと	4 変わったこと
5 時(期間・季節・時間帯)	6 場所	7 あらすじ	
8 一番大きく変わったこと	9 人物関係図		
10 どこで変わったか	11 大事な言葉や文		
12 自分が好きな言葉、場面			
13 作品の主題	14 声に出して言える言葉・文		

※ 参考 白石範孝『10の観点で読むアニメーションゲーム』(学事出版)

例えば「賢治のおすすめ作品をしょうかいしよう」では、作品の主題を読み取る方法を身に付けさせる。そこで「作品中の大きなできごと」が、なぜ「中心人物の心情の変化」を引き起こしたのか、「その理由を考える」といった方法で主題への迫り方を身に付けさせた。この方法は賢治作品の紹介カードづくりでも活用され、子どもたちはそれぞれに選択した作品の主題を自分の力でまとめることができた。

(2) 「読むこと」領域の評価の工夫

単元で身に付けた言語能力を自覚させることで、学習した達成感を醸成できると考えた。そこで、A4判1枚の用紙に1単位時間ごとのまとめをマップ

形式で書き足していく「簡易累積型自己評価表」を活用した。「伝えてみよう!『狂言』」でも、1単位時間ごとや単元前後における自己の変容を見つめ、達成感を持ったことが自己評価表(図1)から読み取れた。また、自己評価表そのものについても、「自分が何を分かったのかが分かった」「後で振り返ることもできるので便利」「とても使いやすい」など、多くの好意的な感想が子どもたちから寄せられた。簡易な上に、子どもの達成感のみならず指導にも評価にも生かすことができ有効であったと考える。

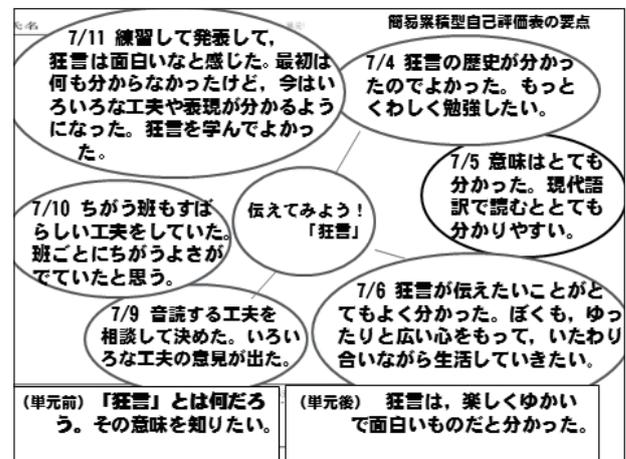


図1 児童の簡易累積型自己評価表の要点をまとめたもの

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

実践した二つの単元の市販テストの平均点は93点であった。また、他の調査(事前事後テスト・意識調査)においても、ねらいとした言語能力や意識の高まりが見られた。このことにより、文学的文章の「読み取り」の時数減に対応した、ねらいとする言語能力を確かに身に付けさせるための「教材文活用」の授業の有効性が明らかになった。また、子ども自身が1単位時間ごとに身に付けた言語能力や単元での成長を自覚でき、達成感を味わえる簡易累積型自己評価表の実効性や有効性も明らかとなった。

2 課題

単元における評価の際は、単元全体を見通した評価計画を立てておくことが有効であると思われた。

今後、明らかになった授業改善のポイントを伝えていくことで、子どもたちの言語能力の向上に寄与していきたい。